

デカルトの連続創造説(la doctrine de la création continuée)の問題

テキスト

5930 『省察』

Descartes, *Meditationes de prima philosophia*, 1641, 1642.
OEuvres de Descartes, publiées par Ch. Adam et P. Tannery. Tome VII. Paris : Vrin, 1904. [= AT. VII]

『方法序説』

5935 Descartes, *Discours de la méthode*, 1637.
OEuvres de Descartes, publiées par Ch. Adam et P. Tannery. Tome VI. Paris : Vrin, 1902. [= AT. VII]

デカルトは「第二省察」で次のように述べている。

5940

Ego sum, ego existo, quoties a me profertur, vel mente concipitur, necessario esse verum. [AT. VII, p. 25.]

私は在る, 私は存在する, というこの命題は, 私によってこれが言い表わされ, あるいは, 精神によって捉えられる度毎に(quoties), 必然的に真である。

5945

すなわち, この命題は言表されるその瞬間においてのみ真であるとは言えるけれども, 私の存在は恒常的に知られるわけではないから, それが意識されない間は, 私の存在は真であることが検証されない, ということになる。

5950

nam forte etiam fieri posset, si cessarem ab omni cogitatione, ut illico totus esse desinerem. [AT. VII, p. 27.]

というのも, もし私が考えることをすっかりやめてしまうならば, おそらくその瞬間に, 私は存在することをすっかりやめてしまうということが起こり得るかもしれないからである。

5955

ここから, 私が思惟していないときにも, 私が存在し続けているとすれば, それを保証するなんらかの理屈が必要になる。そこで, デカルトによって持ち出された説のひとつが, スコラの伝統を引く, いわゆる「連続創造説」である。デカルトによれば, およそ, すべてのものが存在する原因を探究して行くと,

5960

Potestque de illa(sc. causa) rursus quaeri, an sit a se, vel ab alia. [AT. VII, p. 49]

5965

そしてさらにその原因について, それ自体によってあるのか, あるいは

は、他のものによってあるのか、をたずねることができる。

続けて、デカルトが言うには、

5970

Nam si a se, patet ex dictis illam ipsam Deum esse, quia nempe, cum vim habeat per se existendi, habet proculdubio etiam vim possidendi actu omnes perfectiones quarum ideam in se habet, hoc est omnes quas in Deo esse concipio. Si autem sit ab alia, rursus eodem modo de hac altera quaeretur, an sit a se, vel ab alia, donec tandem ad causam ultimam deveniatur, quae erit Deus. [AT. VII, pp. 49-50.]

5975

5980

というのは、もしそれ自体によってあるなら、その原因そのものが神であることは、上述したことから明らかであるから。なぜなら、それはそれ自身で存在する力をもっているのであるから、その観念がうちにもっているすべての完全性を、言い換えれば、神においてであると私が考えるすべてを、現実的に所有する力をもまたもっていることは間違いないからである。しかし、もしそれが他のものによってあるなら、さらに同じようにして、その他のものがそれ自身によってあるのか、あるいは、他のものによってあるのかとたずねられるであろう。そして、ついには究極の原因、つまりは神に達するであろう。

5985

つまり、デカルトによれば、それ自体によってあるのは、神だけであり、それ以外のすべてのものは、

5990

leur estre devoit dependre de sa puissance, en telle sorte que'elles ne pouvoient subsister sans luy un seul moment. [AT. VI, p. 36.]

5995

その存在を神の力に依存せざるを得ず、神なしにはほんの一瞬たりとも存在できない。

すなわち、逆の言い方をすれば、今、存在しているものは、存在するために神の協力を欠くと、それはたちまち無に帰することになる。しかし、私が存在しているとすれば、

6000

adeo manifeste concludo Deum etiam existere, atque ab illo singulis momentis totam existentiam meam dependere, ut nihil evidentius, nihil certius ab humano ingenio cognosci posse confidam. [AT. VII, p.53.]

6005

神もまた存在すること、そして私の全存在は各瞬間において神に依存していることを私はきわめて明白に結論するので、人間精神によって、

これ以上に明証的に、これ以上に確実に知られるものは何もないと、私は確信するほどである。

6010 従って、また、次のように言われる。

quia considero temporis partes a se mutuo sejungi posse, atque ita ex eo quod jam sim non sequi me mox futurum, nisi aliqua causa me quasi rursus efficiat singulis momentis, non dubitarem illam causam, quae me conservat, efficientem appellare. [AT. VII, p. 109.]

6015

私の考察するところでは、時間の諸部分は互いに分離されることができ、こうして私がすでに存在していることから、或る原因が各瞬間に私をいわば再度造り出すというのでないかぎり、引き続いて私があるであろうということは帰結しないから、私は、私を維持（保存）する原因を作動因と呼ぶことに疑いをもつ気にはならない。

6020

Quoniam enim omne tempus vitae in partes innumeras dividi potest, quarum singulae a reliquis nullo modo dependent, ex eo quod paulo ante fuerim, non sequitur me nunc debere esse, nisi aliqua causa me quasi rursus creet ad hoc momentum, hoc est me conservet. Perspicuum enim est attendenti ad temporis naturam, eadem plane vi & actione opus esse ad rem quamlibet singulis momentis quibus durat conservandam, qua opus esset ad eandem de novo creandam, si nondum existeret; adeo ut conservationem sola ratione a creatione differre, sit etiam unum ex iis quae lumine naturali manifesta sunt. [AT. VII, pp. 48-49.]

6025

なぜなら、人生のすべての時間は無数の部分に分割されることができ、しかもその各部分は、残りの部分に少しも依存しないので、私が少し前に存在したことから、私が今存在していなければならない、ということが帰結するためには、何らかの原因が、この瞬間に私をいわば再び創造する、すなわち、私を維持（保存）するということがなければならないからである。というのも実際、時間の本性に注意する人にとっては、明らかなことであるが、どんなものであれ、それが持続する各瞬間において維持（保存）されるためには、そのものがまだ存在していないときに、それを新たに創造するのと全く同じ力とはたらきを要するからである。従って、維持（保存）はただ観点（考え方、ratio）の上で創造と異なるにすぎない、ということもまた、自然の光によって明白なことがらのひとつである。

6030

6035

6040

6045